

教育研究業績書

2018年05月14日

所属：心理・人間関係学科

資格：准教授

氏名：井上 雅勝

研究分野	研究内容のキーワード
実験心理学	言語処理、文理解、日本語
学位	最終学歴
博士（人間科学）、学術修士	大阪大学大学院 人間科学研究科 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. 心理統計法	2010年04月	大心2年「心理統計法入門」および「応用心理統計法」の講義で用いる教科書
2. 心理統計法	2007年04月	心理・社会福祉学科2年「心理統計法」の講義において使用する講義内容に即した教科書を作成した。
3. 実験レポートの書き方	2007年04月	心理学実験実習Ⅰ・Ⅱの実験レポート作成のため、卒業論文に準じた書式・文章構成法・文章表現法に関する詳細な資料集を作成した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 直接指導者と研究者の専門用語理解度のすれ	2009年12月19日	井関良美・井上雅勝・則定百合子 文部省私立大学学術研究高度化推進事業 オープンリサーチセンター 平成21年度第3回公開講座 発達障害専門用語の分かりにくさを考える－教育・保育直接指導者と専門家を繋ぐ試み－において、用語の重要度と理解度ノズレに関する調査家かを報告した。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員	2011年12月01日2012年11月30日	科研費一次審査委員として、実験心理学領域の審査120件を担当

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 言語心理学入門	共	2012年11月刊行	培風館	E. キンチ, D. カカミス, W. キンチ, 森島泰則, 高橋登, 呂本俊亮, 土方裕子, 白井章詞, 井上雅勝, 大石衡聴, 島田英昭, 武田篤, 小高佐友里, 猪原敬介, 井関龍太, 常深浩平 曖昧文の理解過程に関する知見を概観するとともに、特に心理学的見地から検討された近年の実証的研究を紹介し、文がどのように理解されているのかを論じた。担当：第9章文の理解（井上雅勝・大石衡聴共著）（pp. 110-126）
2. 心理学英和・和英基礎用語集	共	2010年03月刊行	福村出版	安藤・井上・小花和・W・齋藤・佐方・杉村・松村 心理学の基礎的な用語・人名について英語・日本語について双方向から訳をみることのできる用語集を作成した。 担当：認知心理学に関する用語
3. 心理統計法	共	2007年04月刊行	大和印刷	安藤明人, 小花和尚子, 井上雅勝 心理・社会福祉学科2年「心理統計法」の講義において使用する講義内容に即した教科書を作成した。 担当：検定概念と分散分析に関する部分
4. ことばの実験室－心理言語学へのアプローチ	共	2005年04月刊行	ブレーン出版	川崎恵里子, 永井淳一, 重野純, 小林由紀, 増井透, 中本敬子, 阿部義信, 柏崎秀子, 井上雅勝 構造的曖昧文の理解過程について、近年の相互作用的モデルおよび日本語における諸研究を概説した。 担当：第5章曖昧文の理解（pp. 103-131）

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
5. 読み-脳と心の情報処理	共	1998年09月 刊行	朝倉書店	神部・芋阪・梶井・松田・井上・横澤・中條・山田・御陵・牧岡・小田・河村・溝渕・櫻井・芋阪 人間が文を理解するメカニズムについて、ガーデンパス現象に基づいたこれまでの実験心理学的知見を網羅的に解説したうえで、英語だけに基づいた先行研究の問題点をあわせて指摘し、特に日本語の文理解がどのようにおこなわれているのかを、今後の研究の視点と課題を含めて論じた。 担当：第5章ガーデンパス文の読みと文の理解 (pp. 72~89)
6. 変わるメディアと教育のあり方-高度情報化社会における人間のくらしと学び 第2巻	共	1996年05月 刊行	ミネルヴァ書房	水越・吉田・木原・山口・中島・井上・菅井・野嶋・佐伯・佐賀・山内・安川・田中・美馬・黒田・黒上・三宅・森本・江副 映像リテラシー育成の原点となる人間の映像処理様式について、筆者らが行なった眼球運動測定実験の成果から概説し、これをもとに、教育実践場面における映像メディア利用の可能性を、G. Salomonの研究を踏まえて考察した。担当 (pp. 75~88)
2 学位論文				
1. ガーデンパス現象に基づく日本語文理解過程の実証的検討-予測的処理の可能性-	単	2000年03月24日学位授与	大阪大学大学院人間科学研究科 博士 (人間科学) 学位論文	日本語文理解メカニズムの解明を目的として、構造曖昧性の解消におけるガーデンパス現象に基づいた12の実験・調査研究をあげ、そこでえられた、(1)目的語有生性に基づくガーデンパス効果の非対称性、(2)動詞分布のエントロピー差に基づくガーデンパス効果の非対称性、(3)先行文脈がもたらすエントロピー差に基づいたガーデンパス効果の非対称性、といった知見から、文の理解過程を説明する「予測可能性モデル」を提案し、その妥当性を実証した。全(pp. 1-150)
3 学術論文				
1. 固有名詞の識別性に基づく文の構造的曖昧性の処理	単	2012年03月	武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学) 60巻	日本語曖昧文の理解において、固有名詞の熟知性が高くなるとガーデンパス効果が小さくなるという知見を見だし、ワーキングメモリへの処理負荷の高低が曖昧性の保留処理に影響することを明らかにした。全(pp. 71-79)
2. The Effect of Quantification in Japanese Sentence Processing : An Incremental DRT Approach.	共	2007年7月	Proceedings of the Fourth International Workshop on Logic and Engineering of Natural Language Semantics (LENLS2007).	Kurafuji, T., Inoue, M., Matsui, M. F., Miyata, T., & Ohtani, A. 普遍量化表現を含む曖昧文の理解ではガーデンパス効果が低減することを見いだした実験結果を基礎に、漸進的に文の意味解釈を構築する新たな文理解モデル (incremental DRT) を提案した。(pp. 179-193)
3. 普遍量子化「すべて」によるガーデンパス効果の減少-日本語文処理における曖昧性解消への意味論的アプローチ	共	2007年07月	信学技報TL2007-13	井上雅勝, 蔵藤 健雄, 松井 理直, 大谷 朗, 宮田 高志 Kurafuji et al. (2007)のincremental DRTは、談話表示構造が漸進的に構築される過程で、文中の名詞句に普遍量化表現が含まれる場合2つのDRSが導入され一時的曖昧性を保持する余地が生じるが、裸名詞句の場合には単一DRSだけが導入されるため、1つの解釈だけが得られること、さらに後続名詞句が現れると再解釈が必要となり、ガーデンパス効果が生じると仮定する。本発表では、この妥当性を検証する新たな実験的証拠を提示した。(pp. 23-28)
4. 日本語文の理解における曖昧性の解消と保留	単	2006年08月	認知科学, 第13巻	日本語構造曖昧文の理解におけるガーデンパス効果が語句間の共起強度に基づいて変動することを見いだした結果から、共起情報が構造的曖昧性の解消と保留を決定する重要な要因であることを明らかにした。全(pp. 353-368)
5. 日本語文理解におけるガーデンパス効果	単	2004年03月	武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学) 51号	日本語文理解におけるガーデンパス効果を扱った全ての研究の情報 (文献情報・実験方法・事例・結果) をデータベース化した上、これまでの知見の総括と残された問題について論議した。全 (pp. 57~66)
6. 日本語の文理解に関する心理言語学的研究	共	2004年03月	平成13-15年度科学研究費補助金 基盤研究C (1) 研究成果報告書 課題番号13610661	坂本勉・玉岡賀津雄・時本真吾・広瀬由紀・井上雅勝 「人間が言語を実際どのように使うのか」という問題提起について、日本語文理解過程に関わる諸研究のreview、またいくつかの実験的研究によってその一端を明らかにすると共に、今後の研究の方向を示した。担当 (pp. 10~15, pp. 81~97)
7. Influence of verb-predictability on ambiguity resolution in Japanese.	共	1999年08月	Proceedings of the 2nd International Conference on Cognitive Science and the 16th Annual Meeting of the Japanese Cognitive Science Society Joint Conference.	井上・伝 文章完成法による動詞予測分布の測定と、ガーデンパス効果に基づくリーディング実験を行い、日本語の構造的曖昧性解消過程において、名詞句からの動詞の予測可能性が用いられるとする「予測可能性モデル」の検証を行なった。(pp. 499~502)
8. Disambiguation with verb-predi	共	1997年08月	Proceedings of the ni	伝・井上

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
stability: Evidence from Japanese garden-path phenomena.			nineteenth annual conference of the Cognitive Science Society. Lawrence Erlbaum.	日本語の構造的曖昧性解消過程において、目的語の有生性に基づくガーデンパス効果の非対称性が現れるという新しい事実を取り出し、ここから、名詞句からの動詞予測分布の差が曖昧性の解消に用いられるという「予測可能性モデル」を提案した。全 (pp. 179~184)
9. 構造曖昧文の理解におけるガーデンパス現象	共	1997年07月	心理学評論, 40巻	井上・中島 ガーデンパス現象に基づいた文理解モデルとその実証的知見について批判的に検討し、相互作用的な説明の妥当性を論じると共に、日本語における筆者の知見をあわせて紹介・比較することにより、今後の日本語文理解研究の検討課題を提示した。(pp. 169~187)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. こころの科学としての言語研究－心理学と言語学の対話－	共	2001年11月	日本言語学会第123回大会	坂本勉・石田潤・井上雅勝・酒井弘・長谷川信子 共起情報のような語用論的情報が文理解に影響を与えるという知見を例に、心理学的と言語学の融合領域である心理言語学の今後の課題について論じた。担当：文理解実験の現場から一理論と実証のすれ違い・相互理解・相互作用
2. 学会発表				
1. 統計改革とERP (1)－線形混合モデル分析の適用	共	2017年2月19日	坂本勉記念神経科学研究会2017	事象関連電位研究のデータ分析において、今後必要となる線形混合モデル分析の概要と留意点、および文献の紹介を行った。(井上雅勝・矢野雅貴)
2. Statistical reform and ERP (2) : An Introduction to EEG data analysis	共	2017年2月19日	坂本勉記念神経科学研究会2017	事象関連電位データの分析に線形混合モデル分析を応用するうえで必要なテクニカルな詳述を紹介し、あわせてデータ分析方法についても解説を試みた。
3. 統計改革と心理言語学－帰無仮説検定から量的判断へ(効果量と信頼区間)	単	2016年7月16日	公開ワークショップ－心理言語学と神経科学(九州大学箱崎キャンパス21世紀交流プラザ)	近年、心理学および関連領域における統計改革の動きを見据え、学術雑誌等に記載を求められることになる効果量および信頼区間の概念・算出法・評価法などについて詳述した。
4. Rを用いた線形混合モデル分析(LME)におけるp値の算出と単純傾斜検定の分析方法	単	2015年10月24日	関西心理言語学研究会第39回meeting発表	近年の心理言語学的研究において分析方法の主流となりつつあるRプログラムを用いた線形混合モデル分析(主にlme4パッケージを用いた場合)では、これまで、(1)固定因子の自由度とp値が計算できない、(2)交互作用が有意であった場合の単純傾斜検定(分散分析における単純主効果の検定に相当)ができない、などの問題があった。一方、ここ数年で、Satterthwaite近似を用いてtの自由度およびp値を計算するlmerTestパッケージが開発され、論文にも表記される例があらわれはじめている。さらに、このパッケージとPreacherのサイト(http://quantpsy.org/)を併用することにより、単純傾斜検定を実施する方法も紹介されている(清水, 2014)。今回は、交互作用の下位分析としての単純傾斜について若干解説した後、Reading timeサンプルデータを使って、実際に上の分析の操作を実習する。
5. 非正規語順・目的語関係節・ガーデンパス－3つの構造的な複雑さに同時に直面すると	単	2014年6月21日	関西心理言語学研究会第32回meeting発表	(1) 加藤が宮田を止めた武田を呼び出した (2) 加藤を宮田が止めた武田が呼び出した 本研究では、self-paced reading taskによる語句毎の読み時間の測定に基づき、(1)、(2)文のような「含まれる要素は同じだが語順が異なる」2つの構造的曖昧文について、それぞれの文のGP効果(注)を比較した。すると、(1)のHN領域の平均RTが1211msであったのに対し、(2)では1568msに達した。このGP量の非対称性は、何に由来するのだろうか。本発表ではまず、(2)のHN領域での再解釈処理において、目的語関係節効果と非正規語順効果が重複することに着目し、他の条件ないし他の領域のRT量を利用して、それらの効果分を減じるという分析を試みる。その上でなお残存する(1)-(2)のRT差が真にGP量の条件差を示すものであるとみなし、それがいかなる処理の違いに由来するのかを検討する。
6. 混合モデル分析ワークショップ	共	2013年08月	関西心理言語学研究会ワークショップ	神長伸幸・井上 雅勝 線形混合モデル分析について、小グループで分析実例を検討しながら、今後の発展可能性と課題を論議した。
7. 名詞句のタイプが日本語文理解のガーデンパス効果に及ぼす影響(2)	単	2013年06月	日本認知心理学会第11回大会	固有名詞を含む構造的曖昧文の理解において、ガーデンパス効果が大きくなる現象が、語句間の何らかの共起関係が高いことによって単文が選ばれやすくなったことに基づくという可能性を排除するため、共起関係をもち得ない仮名の固有名詞を含む文においても大きなGP効果があらわれることを実証した。(p. 73)
8. ワークショップ：Rを用いた混合	単	2013年02月	関西心理言語学研究会	Rを用いた線形混合モデル・ロジスティック混合モデ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
モデル分析			ワークショップ	ルについて、分散分析・回帰分析の延長としての混合モデルの特徴を概説した後、実際のデータを例に、Rを用いて分析する方法のチュートリアルも実施した。
9. 数量化による構造的曖昧性解消の遅延	単	2012年6月	日本認知心理学会第10回大会	「23人の警官が」のような数量化表現を加えることによって、複数の量化解釈可能性に対処するため文解釈が一時的に保留され、その結果、一時的構造曖昧文で見られるガーデンパス効果量が減少するという知見を見いだした。(p. 42)
10. ワークショップ：t検定・分散分析から混合モデルへー文理解研究における導入例から学ぶ	共	2012年12月	日本認知科学会第29回大会	神長伸幸・井上雅勝・新井学 近年、言語心理学的研究において用いられる線形混合モデル分析について、Rによる読み時間データの分析の実例を紹介しつつ、線形混合モデルの分析方法・留意点・残された課題などを論議した。 担当：Rを用いた線形混合モデル分析－Reading timeデータの分析手順と要点 (pp. 35-40)
11. An on-line model of quantifier s interpretation in Japanese.	共	2012年08月	The annual meetings of the Cognitive Science Society (CogSci 2012).	Kurafuji, T., Inoue, M., & Matsui, M 単数量化文で減少するGP効果が、二重量化文において再度増加するという知見から、2つのスコープ曖昧性が存在するとき、統語的処理が遅延されるというモデルを提案した。
12. 非正規語順・目的語関係節・ガーデンパス-3つの構造的な複雑さに同時に直面するとー	単	2012年06月	第32回関西心理言語学研究会	(1) 加藤が宮田を止めた武田を呼び出した (2) 加藤を宮田が止めた武田が呼び出した のような「含まれる要素は同じだが語順が異なる」2つの構造的曖昧のGP効果を比較したところ、(2)で大きなGP国府方効果が見られた。(2)のHN領域での再解釈処理において、目的語関係節効果と非正規語順効果が重複することに着目し、他の条件ないし他の領域のRT量を利用して、それらの効果分を減じるといふ分析を試みる。その上でなお残存する(1)-(2)のRT差が真にGP量の条件差を示すものであるとみなし、それがいかなる処理の違いに由来するのかを論議した。
13. ワークショップ：回帰分析・分散分析・一般線形モデルー線形混合効果モデルの理解のために	単	2012年05月	第18回関西心理言語学研究会	線形混合モデルの学習を念頭に、その基礎となる回帰分析・分散分析の違いと共通点を、一般線形モデルの観点から解説した。
14. 固有名詞の熟知度がガーデンパス現象に及ぼす効果	単	2011年09月	日本心理学会第75回大会	同じ固有名詞でも、その熟知価が異なることによって、日本語構造的曖昧文のガーデンパス効果量に差異が現れることから、熟知価の違いが作動記憶に占める負荷に差異をもたらし、その結果作動記憶上に保持できる複数の文解釈可能性が変化するという仮説が実証された。(p. 878)
15. 文の意味的曖昧性が構造的曖昧性の解消と保留に及ぼす影響 (2)	単	2011年05月	日本認知心理学会第9回大会	名詞句の数量化の有無によって、日本語構造曖昧文の理解におけるガーデンパス効果に差異が現れることをとりだし、量化解釈決定の保留を促すというモデルの妥当性を実証した。(p. 74)
16. 文の意味的曖昧性が構造的曖昧性の解消と保留に及ぼす影響	単	2010年05月	日本認知心理学会第8回大会	名詞句の量化によって生じる文解釈の曖昧性が、構造的曖昧性に直面した文処理に遅延処理を促す要因となることを、読文時間を測定する方法により明らかにした。(p. 81)
17. 保育者の気になる子どものとらえ方ー発達臨床心理学用語に対する認識との関連ー	共	2010年03月	日本発達心理学会第21回大会	小花和Wright尚子・佐方哲彦・羽川可奈子・則定百合子・井関良美 保育者や保育士等の保育現場実践者が、専門家が用いる発達心理学の専門用語をどの程度理解しているかの調査から、専門家と現場との意思疎通が円滑であるかどうか、あるいは用語の理解度が保育態度とどのように関連があるかを調査研究に基づいて検討した。
18. 名詞句のタイプが日本語文理解のガーデンパス効果に及ぼす影響 (2).	単	2009年09月	日本心理学会第73回大会	裸名詞句/指示的名詞句を含む曖昧文のガーデンパス量が異ならないことから、井上(2008)で見られた裸名詞句/固有名詞句の差は、後者の高い処理負荷によって単文解釈が選好される傾向に基づくことを明らかにした。(p. 932)
19. 保育士における発達臨床心理学用語の理解度に関する研究	共	2009年09月	日本心理学会第73回大会	則定百合子・井上雅勝・井関良美 (p. 1128)
20. 「一緒に」の処理が文の曖昧性解消に及ぼす影響	単	2009年07月	日本認知心理学会第7回大会	「一緒に」という句の存在によって主語が量化されることによって、構造的曖昧文の理解に行けるガーデンパス効果の量が減少することを取り出し、量化表現において処理の一時的保留が生じるという仮説を実証した。(p. 85)
21. 全数量化表現の文理解過程ーIncremental-DRTモデルの実証的検討ー	共	2008年09月	日本認知科学会第25回大会	蔵藤健雄、松井理直、大谷朗、宮田高志 「(すべての)警官が(すべての)犯人を捕まえた男性を」のような全数量化表現を持つ構造的曖昧文のガーデンパス効果を読文実験により比較し、Incremental-DRTモデル(Kurafuji et al., 2007)の妥当性と問題

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
22. 名詞句のタイプが日本語理解の ガーデンパス効果に及ぼす影響	単	2008年09月	日本心理学会第72回大会	点を検証した。(pp. 330-331) (a)小林が社員を叱った安田を呼びつけた。 (b)小林が平田を叱った安田を呼びつけた。 のような目的語の名詞句タイプが異なる構造的曖昧文の読み時間を比較し、(b)のガーデンパス効果がより大きいことを見いだした。この結果を、固有-普通名詞の記憶負荷の差という観点から考察した。(p. 983)
23. 談話処理が文の曖昧性解消に及ぼす影響	単	2008年05月	日本認知心理学会第6回大会	「警官と一緒に犯人を捕まえた男性を…」といった単文/関係節曖昧性をもつ文について、「捕まえてくれた」のような話者に視点がおかれやすい視点動詞を用いた場合には、「一緒に」の指示対象に「話者」が割り当てられ単文解釈が選好されやすくなるため、「男性に」の再解釈に要する処理負荷が増加することを見いだした。このことから、談話処理上の曖昧性が文の曖昧性解消ないし保留に相互作用的に影響する可能性を示唆した。(p. 117)
24. 「一緒に」の談話処理にもとづく 構造的曖昧性の解消	単	2007年09月	日本認知科学会第23回大会	解釈の曖昧性をもつ文の理解において、「一緒に」のような指示対象が曖昧な語を有する場合、後方要素ではなく話者ないし先行詞を参照する傾向が高いこと、(2)さらにこうした談話処理が解釈の曖昧性の解消ないし保留をガイドする要因となることを実験により示した。(pp. 224-225)
25. 日本語非正規語順文の理解に及ぼす プロソディ情報の影響 (2)	共	2007年05月	日本認知心理学会第5回大会	井上雅勝・松井理直 日本語2項動詞文の理解過程であらわれると考えられてきた非正規語順効果が、文の韻律的情報の差異によって消失することを実験的に見だし、焦点化の観点からこの現象を再考した。(p. 84)
26. 構造的曖昧文のガーデンパス効果 に及ぼす動詞時制の影響	単	2006年11月	日本心理学会第70回大会	動詞の時制（非過去形・過去形）およびその形態的出現頻度によって、日本語構造曖昧文の理解におけるガーデンパス効果に変化することを見いだした。(p. 958)
27. ワークショップ：言語認知研究再 考ー心理学の視点から考える	共	2006年11月	日本心理学会第70回大会	増田尚史・Terry, Joyce・広瀬友紀・筑一彦 ワークショップにおいて、語彙的処理・曖昧文の処理・音韻的処理という3つのアスペクトから、日本語の言語処理研究に関する最新の知見を報告した。(W. 51)
28. 日本語非正規語順文の理解に及ぼす プロソディ情報の影響	共	2006年08月	日本認知心理学会第4回大会	松井理直 名詞句のもつプロソディによって日本語非正規語順文でみられる処理負荷が変化することを見だし、この効果が統語的操作に基づくという従来の仮説に基づくのではなく、むしろ焦点の競合という観点から説明しうることを明らかにした。(p. 187)
29. ガーデンパス効果に及ぼす動詞の 時制・アスペクトの影響	共	2005年09月	日本心理学会第69回大会	青山育子 日本語曖昧文理解におけるガーデンパス効果が動詞の時制・アスペクトによって変動することを実証的に検討した。(p. 934)
30. 構造的曖昧性の解消過程における 統語・語用論的情報に基づく処理 の選好性	共	2005年07月	日本認知科学会第22回大会	青山育子 日本語理解の関係節付加において、語用論的適切性(plausibility)の影響が見られることを実証的に取り出した。(pp. 372-373)
31. 日本語関係節の再解釈に及ぼす名 詞飽和性の影響	共	2005年07月	日本認知科学会第22回大会	青山育子 日本語曖昧文理解の再解釈段階で、名詞の飽和性が再解釈の方向を決定することを見だし、再解釈において語用論的情報が影響することを論じた。(pp. 218-219)
32. 語句と語句の非対称的結合関係ー 語彙決定課題による検討ー	単	2004年09月	日本心理学会第68回大会	2つの語句間結合の強度が非対称的であることを、語彙決定課題による反応時間測定法によって明らかにした。(p. 861)
33. 語句結合に基づいた日本語GP現象 の数量的予測ー語彙決定課題の反 応時間による再検討ー	単	2004年07月	日本認知科学会第21回大会	日本語GP現象が語句の結合強度に基づいて連続量的に変化することを、語彙決定課題による数量データと対応させて明らかにした。(pp. 224-225)
34. 同義語への意味飽和課題による意 味表象の抑制	単	2003年09月	日本心理学会第67回大会	先行プライムへの意味飽和課題によって同義語ターゲットの語彙決定課題反応時間が増加することから、意味飽和課題が真に意味表象の抑制であることを実証した。(p. 595)
35. 語彙的手がかりが弱い場合のガー デンパス効果	単	2003年07月	日本認知科学会第20回大会	語彙の手がかりの弱い日本語曖昧文で、ガーデンパス効果の量が相対的に大きくなることを取り出し、先行モデルの修正を図る知見を得た。(pp. 200~201)
36. 動詞予測分布のエントロピと語彙 活性との関係ー動詞の自由発話 課題による検討ー	単	2001年11月	日本心理学会第65回大会	主語ないし主語ー目的語名詞句からの動詞予測可能性(予測分布のエントロピ)が、動詞の自由発話課題の反応時間に及ぼす影響を検討した。その結果、エントロピが低くなる(予測可能性が高い)ほど、動詞の発話時間が短くなることが実証された(p. 493)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
37. 名詞句からの予測分布が動詞の活性化に及ぼす影響 (2)	単	2001年07月	日本認知科学会第18回大会	主語ないし主語一目的語名詞句からの動詞予測可能性 (予測分布のエントロピ) に基づいて、動詞の語彙大課題における反応時間が系統的に変動することを実験により明らかにし、予測可能性モデル (Den & Inoue, 1997) の主張の一部を実証した。 (pp. 196~197)
38. 談話文脈内の語の表出—動詞予測分布に及ぼす先行文の効果	単	2000年11月	日本心理学会第64回大会	先行文脈情報の有無により、同一名詞句からの動詞予測分布のエントロピが異なることを、多数の被験者に対する文章完成法に基づいた調査結果から明らかにした。 (p. 794)
39. ワークショップ：言語の認知心理学的研究はいかにあるべきか？	共	2000年11月	日本心理学会第64回大会	阿部・金子・往住・玉岡・井上・坂本・山梨 2名の心理学者による日本での言語心理学的研究の現状と問題点・課題の説明、および言語学的立場からの心理学研究への批判と提案をそれぞれ行い、言語の認知心理学的研究の将来展望について、フロアとの討論もまじえ総合的に論議した。 (p. S36)
40. 先行文脈による予測可能性の変化が日本語ガーデンパス現象に及ぼす影響	単	2000年06月	日本認知科学会第17回大会	動詞予測分布の違いがガーデンパス効果に影響するという予測可能性モデルの提案に対して、語句が持つdefaultの結合強度がそれに影響するという代替案の可能性を排除するため、先行文脈情報の有無によって分布のエントロピが異なることを利用し、defaultの結合強度によらない説明が可能であることを示した。 (pp. 56~57)
41. 名詞句からの予測分布が動詞の活性化に及ぼす影響	共	1999年09月	日本心理学会第63回大会	井上・伝 予測可能性モデルでは、日本語では名詞句から動詞が予測され、その強さが動詞予測分布のエントロピと関係すると提案される。このことを実際に検討するため、名詞句を呈示した後、分布のピーク動詞を呈示し、その語彙性判断に要する時間を測定して仮説を検証した。 (p. 672)
42. 日本語ガーデンパス現象に及ぼす目的語有生性の影響—動詞ヲとニの場合	単	1998年07月	日本教育心理学会第40回大会	目的語有生性に基づくガーデンパス効果の非対称性という知見の妥当性をさらに保証するために、刺激文の統制や刺激数の充実をはかり、加えて目的語助詞についてヲとニの2つを導入したところ、上と同様の非対称性を得た。 (p. 325)
43. 目的語の有生性が動詞のlexical accessに及ぼす影響	共	1998年06月	日本認知科学会第15回大会	井上・伝 目的語の有生性によって動詞の予測分布が異なれば、動詞の予測される強さもその分布に従うものと推定される。ここでは、その仮説を検証するために、目的語の有生性別に、目的語を呈示した後の動詞の語彙性判断課題に要する時間を測定し、この予測を確認した。 (pp. 226~227)
44. 名詞の有生性が日本語ガーデンパス現象に及ぼす影響 —self-paced reading法による実験的検討—	共	1997年06月	日本認知科学会第14回大会	井上・伝 英語における曖昧性解消モデルでは、動詞がもつ意味的情報に基づいて曖昧性が解消されると提言する。しかし、本研究で行われた日本語の構造的曖昧性解消過程では、そのような英語によるモデルでは説明できない「目的語の有生性に基づくガーデンパス効果の非対称性」という新しい知見が見出された。 (pp. 40~41)
45. 予測可能性に基づく曖昧性解消：日本語ガーデンパス現象を証拠に	共	1997年06月	日本認知科学会第14回大会	伝・井上 上の実験結果がもたらされた理由を検討するため、目的語の有生性別に、言語コーパス資料に対して動詞の予測分布のエントロピを計算したところ、有生目的語と無生目的語でエントロピの高さに違いが見られることが見出された。この知見と上述のリーディング実験に基づき、名詞句からの動詞予測分布の差が曖昧性の解消に用いられるという「予測可能性モデル」を提案した。 (pp. 46~47)
46. 2つのself-paced-reading法によるガーデンパス現象の測定—動詞ガとハの比較について	単	1995年09月	日本教育心理学会第37回総会	self-paced-reading法で用いられる孤立呈示モードと累積呈示モードの2つの呈示様式を比較し、後者では前者に対して読み返しの成分が含まれることから、読文時間の比較が容易ではないこと、またその分散が広がる可能性などを指摘した。 (p. 168)
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 統計改革への対処—帰無仮説検定から量的判断へ（効果量と信頼区間）	単	2016年7月20日	武庫川女子大学心理・社会福祉学科 学科FD勉強会	近年、心理学および関連領域における統計改革の動きを見据え、学術雑誌等に記載を求められることになる効果量および信頼区間の概念・算出法・評価法などについて詳述した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
1. 量化文解釈に基づく意味処理モデルの構築	共	2014年	学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）	本研究は、「すべての」や「ほとんどの」のような量化詞を含む文の解釈パターンを実験心理学的手法により調査し、その結果に対して理論的説明を与えることを目的とする。量化詞を含む文のオンライン処理から得られたデータから現行の言語理論を批判的に考察し、より良い心理的妥当性を持った意味表示の新たな言語理論の構築を目指す。
2. 量化文解釈に基づく意味処理モデルの構築	共	2013年	学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）	本研究は、「すべての」や「ほとんどの」のような量化詞を含む文の解釈パターンを実験心理学的手法により調査し、その結果に対して理論的説明を与えることを目的とする。量化詞を含む文のオンライン処理から得られたデータから現行の言語理論を批判的に考察し、より良い心理的妥当性を持った意味表示の新たな言語理論の構築を目指す。
3. 量化文解釈に基づく意味処理モデルの構築	共	2012年	学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）	蔵藤健雄（研究代表者）・松井理直・井上雅勝 本研究は、「すべての」や「ほとんどの」のような量化詞を含む文の解釈パターンを実験心理学的手法により調査し、その結果に対して理論的説明を与えることを目的とする。量化詞を含む文のオンライン処理から得られたデータから現行の言語理論を批判的に考察し、より良い心理的妥当性を持った意味表示の新たな言語理論の構築を目指す。
4. 談話・語用論的処理に基づく文理解メカニズムの実証的・理論的検討	共	2008年	日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究C（一般）	井上雅勝（研究代表者）・蔵藤健雄・松井理直・大谷朗・宮田高志 本研究では、言語学・心理学・言語工学の研究者からなる学際的共同研究体制に基づき、意味・談話処理をベースとした漸進的談話表示理論モデル（Incremental-DRT）を新たに提案・実証した。核となる成果は、量化-非量化の理論的対比から、漸進的に意味を構築する文解釈過程を記述したこと、また、文理解における即時処理と遅延処理双方の可能性に言及し得たこと、さらに、このモデルの妥当性を複数のリーディング実験に基づいて実証したことである。
5. 談話・語用論的処理に基づく文理解メカニズムの実証的・理論的検討	共	2007年	日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究C（一般）	井上雅勝（研究代表者）・蔵藤健雄・松井理直・大谷朗・宮田高志 本研究では、言語学・心理学・言語工学の研究者からなる学際的共同研究体制に基づき、意味・談話処理をベースとした漸進的談話表示理論モデル（Incremental-DRT）を新たに提案・実証した。核となる成果は、量化-非量化の理論的対比から、漸進的に意味を構築する文解釈過程を記述したこと、また、文理解における即時処理と遅延処理双方の可能性に言及し得たこと、さらに、このモデルの妥当性を複数のリーディング実験に基づいて実証したことである。
6. 談話・語用論的処理に基づく文理解メカニズムの実証的・理論的検討	共	2006年	日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究C（一般）	井上雅勝（研究代表者）・蔵藤健雄・松井理直・大谷朗・宮田高志 本研究では、言語学・心理学・言語工学の研究者からなる学際的共同研究体制に基づき、意味・談話処理をベースとした漸進的談話表示理論モデル（Incremental-DRT）を新たに提案・実証した。核となる成果は、量化-非量化の理論的対比から、漸進的に意味を構築する文解釈過程を記述したこと、また、文理解における即時処理と遅延処理双方の可能性に言及し得たこと、さらに、このモデルの妥当性を複数のリーディング実験に基づいて実証したことである。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2010年05月30日受賞	平成21年第7回日本認知心理学会優秀発表賞 新規性評価部門 発表題目『「一緒に」の処理が文の曖昧性解消に及ぼす影響』 日本教育心理学会 日本認知心理学会 日本心理学会 日本認知科学会